

就学前児の反応バイアスについて —混合研究法へのアプローチ—

教育デザインコース 心理学領域

武田 士将

指導教員

福田 幸男

1. はじめに

教育インターンでは、横浜市内にある幼稚園で平成24年12月に参与観察を、平成25年12月に刺激を呈示して反応を調査する心理学実験を行った。ここでは、修士論文としてまとめた心理学実験について述べる。

2. 先行研究

質問の方法によって、幼児の回答は強く影響を受けることが明らかにされている。中島・大島・村井・深谷(2013)は、就学前児を対象に閉ざされた質問(Closed Question)と開かれた質問(Open Question)との違いが回答に影響を与えるか否かを検討している。その結果、就学前児にとっては閉ざされた質問の方が開かれた質問よりも回答が容易であることが示されている。一方で、中澤ら(2013)は、就学前児を対象として、閉ざされた質問であるYes-No質問に対して幼児が肯定バイアス(Yes Bias)を持つか否かについても検討している。その結果、就学前児は肯定バイアスを持つ可能性が示された。

大神田(2010)によると、就学前児はYes-No質問に「はい」と答える偏りを示す反応バイアスを持つという。特に、年少児はとっさに「はい」と答えてしまう自動的な反応バイアスを、年長児は「はい」と答えることを期待されていると理解する社会的な反応バイアスが見られるという。

3. 目的

本研究では、心理学実験の一場面においても、先行研究において述べられている反応バイアスが生じるか否かを検討した。閉じられた質問であるYes-No質問と同義の開かれた質問を用いて、比較検討した。

4. 方法

心理学実験終了後に、「最後にひとつ質問するよ」と伝え、赤いリンゴが描かれた絵(H210mm×W297mm)を見せた。閉じられた質問を用いた群では「これ青いよ

ね」と質問した。開かれた質問を用いた群では「これ何色でしょう」と質問した。

5. 結果

閉じられた質問を用いた群では、「うん」という発話やうなずきの反応を「肯定」とした。「赤い」という発話や首を振る反応を「否定」とした。この結果、肯定した幼児は18人で、否定した幼児は3人であった。片側二項検定の結果、有意な偏りが見られた(18 of 21, $p=.001$)。

開かれた質問を用いた群では、単に「赤」と答えたり、「赤と黄色」と細かい部分も回答したりする反応を「正答」とし、それ以外の回答を「誤答」とした。結果、正答した幼児は56人で、誤答した幼児は1人であった。片側二項検定の結果、有意な偏りが見られた(56 of 57, $p=.000$)。

6. 考察

先行研究において紹介した中澤ら(2013)によって示されてきたように、実験終了後に追加の質問をした場合においても、同様の肯定バイアスが見られることが示された。ここからは大神田(2010)が主張する自動的バイアスと社会的反応バイアスを見分けることは出来ないが、実験後に追加の質問をした場合には、肯定バイアスによって幼児の反応は影響を受けることが認められた。

一方で、閉じられた質問と同義である開かれた質問をしたところ、幼児は問題なく正答出来ることも明らかとなった。これにより幼児に対しては、反応バイアスが生じてしまう可能性がある閉じられた質問より、開かれた質問を用いるべきことが示唆される。

量的調査と質的調査を組み合わせる研究法を混合研究法という。開かれた質問を用いるべきという結果は、従来の量的調査に支えられる心理学実験に質的調査を加えるべきという混合研究法へのアプローチとなるのではないだろうか。